

3 家庭で話そう！ネットいじめの現実と対策

「ネットいじめ」と聞くと、どこか遠い世界の話に感じるかもしれません。しかし、スマホや SNS が日常に溶け込んだ今、子どもたちはいつでも、どこでも、誰かの言葉に傷つく可能性があります。しかも、ネット上のいじめは目に見えにくく、気づいたときには深刻化していることも少なくありません。

ネットいじめの特徴は、匿名性と拡散力です。悪意あるコメントや画像が一瞬で広まり、消すことが難しいため、被害者の心に長く残ります。また、加害者も「軽い冗談のつもりだった」「みんながやっていたから」と罪の意識が薄いまま加担してしまうケースもあります。

保護者としてできることは、まず「ネットいじめは現実には起きている」という認識を持つこと。そして、子どもが安心して話せる環境をつくることです。「何かあったら話してね」と日頃から声をかけておくことで、子どもは困ったときに保護者を頼りやすくなります。

また、家庭でネットの使い方やマナーについて話し合う時間を持つことも大切です。「人を傷つける言葉は、画面の向こうにも届く」「見て見ぬふりも加担になる」といった価値観を共有することで、子ども自身が加害者にも被害者にもならない力を育てられます。

学校や行政も対策を進めていますが、家庭での対話こそが、子どもを守る最前線です。ネットいじめは、家庭で一緒に考え、向き合うべき現代の課題。まずは今日、子どもと「ネットで嫌なことがあったらどうする？」と話してみませんか。

4 子どもが知らずに加害者に？ネットでの言葉の責任

「うちの子がネットいじめの加害者に？」—そんなことはない信じたい。しかし、SNS やチャットアプリが日常に溶け込んだ今、子どもが軽い気持ちで書き込んだ一言が、誰かを深く傷つけてしまうことがあります。悪意がなくても、結果的に加害者になってしまうケースは少なくありません。

ネット上では、顔が見えない分、言葉の重みが軽く感じられがちです。「冗談のつもりだった」「みんなが言っていたから」—そんな理由で投稿された言葉が、相手にとっては深刻な攻撃になることもあります。特に子どもは、言葉の影響力や相手の受け取り方を十分に理解していないことが多く、無意識のうちに加害行為に加担してしまうことがあります。

保護者としてできることは、まず「ネットの言葉にも責任がある」という意識を子どもに持たせることです。画面の向こうには感情を持った人がいること、そして一度発信した言葉は簡単には消せないことを、具体的な事例を交えて伝えると効果的です。

また、家庭での会話も重要です。「こんな投稿を見たけど、どう思う？」「もし友達が傷ついていたらどうする？」といった問いかけを通じて、子ども自身が考える力を育てましょう。禁止や監視だけではなく、対話を通じて価値観を共有することが、予防につながります。

ネットは便利で楽しい場所ですが、同時に「言葉の責任」が問われる場でもあります。子どもが知らずに誰かを傷つけないよう、保護者としてできることはたくさんあります。まずは今日、子どもと「ネットでの言葉」について話してみませんか。